
心から見たいもの

マツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心から見たいもの

【Nコード】

N3561I

【作者名】

マツキ

【あらすじ】

「もし」なんてことがあればさぞかし便利だろう。もし超能力や魔法が使えるら……ってこと。だが不思議な力には不思議な代償が必要になる。俺の出会った「もし」は……そして俺の代償は……。

嫌な出会い（前書き）

試験中にふと思いついたこの話は僕の頭がフル回転されて生まれた良き物なのか、もしくは試験中にこんなことを考えてた優柔不断な思考回路で作られた変な物なのか謎なところです。

嫌な出会い

ふら〜ふら〜ふら〜ん……………。

睡眠不足、疲労、知恵熱これらが襲う中で記憶の維持をしようと必死な俺がいる。

ダルい……………しんどい……………めんどくさい……………やってらんね〜。

たかがテストだぞ？

赤点になつてしまつと死んでしまつわけでもないのに点数を死に物狂いに求める俺たち学生は何だつてんだ？わけわかんねえよ。

つーかこんだけ頭の中で独り言同然に喋つてたら余計に疲れるだろ俺？何も考えるな、昨日詰め込んだ物を白い紙の上に持つていくことだけに頭を使え。

……………。

この時虚ろになつていなければあんなことは絶対しなかったと断言してやる。正直、今でも何故あんなことをしてしまったか謎のままだ。

家と家の間に挟まれる通学路の途中……………眼鏡が落ちてた。

それもただの眼鏡じゃない。

パーティーなどで使用されるようなレンズにきらめいた眼が描かれレンズの間には鼻と付け髭が取り付けられている。

……………何だコレ？

いつもの俺なら気づいてもスルーしていただろつが今は何がおもしろくて何が最悪なのか善悪の区別が判断できそうになかった。

ただ……………気分転換がしたかったんだと思う。

これから何がどう変わるか期待することもなく、何も考えず俺

は眼鏡を拾ってしまった。

拾った勢いあまっていつの間にか眼鏡を顔に装着した。

……………何も変わるわけがない。

目の前で三輪車を乗り回すガキが俺を見てこらえられなくなつた笑いをこぼしていた。

「ぶっ！変な人」

……………今日のテストに感謝するんだなクソガキ。大人げないとはいえ俺はガキにも遠慮はしねえぞ？

……………なんか耳に違和感が残る。

「？」

去つていった三輪車の子の笑い声が耳から離れていない気がした……………。

まあ……………いいや。さつさとこの眼鏡を捨て去つて学校へと歩を進め……………あれ？

眼鏡に触れる手に力を入れても眼鏡が動かない。顔にくつついてるとかじゃなく眼鏡自体が俺の顔から一ミリもズレない。

徐々に頭が冴えてくる。結論を急ごう。どうなってる？動かない……………。

どうやら眼鏡は呪われているようだ。……………ははっ、んなバカな。

抵抗すること5分。

「はずれるおおお！！こんなんで学校行けるかあああ！！！！」

嫌な出会い（後書き）

大体の構想は完成してしまっているの後は書くだけです。

少しずつですが書けしだい更新していきます。

変な出会い（前書き）

今まで投降した話が全部スペースがなくて読みにくくなってると気づきました。すみませんでした。直してみたので一応読みやすくなったと思います。

変な出会い

何で外れねえんだこの眼鏡えええ！

今日はテストあんだよ！絶対休めないんだつての！！つか、眼鏡が外れねえなんて理由で休めねえよ！

学校になんて連絡すりゃいいんだ？

「眼鏡が………髭が………ヒック………学校休みます」

意味わかんねえええ！！相手にちゃんと伝わるわけがねえ！なんたつて俺もわかんねえんだ！！

くそつ。とにかく人目のつかないところへいかねえと恥ずかしくて落ち着くこともままならん。

「その眼鏡、おぬしにようにおうておるのう」

俺を見るなばあー！って、なんか声が若々しくねえか？

せつかくの声を台無しにする言葉遣いで喋る主が気になり、自然と体が振り向いた。 どうせこのバカ顔を見られてしまっているのだ。いまさら隠すこともない。

何の気兼ねなく視線を向けた先にはどうやって上つたのか家の塀にアラビアンな少女が座つて足をプラプラしていた。

小っさいな………いくつだ？というかどこの国の方かな？

色々と疑問が飛び出すがまず何と行ってやればいいのか………なんか変な子だということが第一印象だ。「パンツ見えてるぞ」

「減るもんでもないしこれといって問題ではないのう」

どっからどう見ても幼い女の子なのだがジジババ臭い喋り方とのギャップがありすぎてより変な子に見えた。

「ワシからいわせればお前たちが何故そんなことを気にするのか理解できん」 幼いのは見かけだけでそれ以外は俺よりもずっと大人な奴だな。

つたく。変なもんばっかりだ今日は………。

今まで貯まりに貯まった不幸が厄日となっちまったのか？

ならそのぶん幸運をよこせ！俺は今まで今日に見合うだけの幸運なんてもらった覚えはねえぞ。

「おぬし困っておるのかのう？」

「ん？ああ……確かに困ってるが子供には関係ないの」

こんな奴と話す時間も惜しい。もうテストよりこの眼鏡をなんとかしねえと。なんかねえか……。

「わからんのう……」

「ああ、わかんねえ。お前も含めて変なことが起きてる」「その眼鏡をかけていてもおぬしにとって良いことしかないはずじゃ。外し方など教える必要もないとワシは思うのじゃが」

何だ？この眼鏡を知っているような素振りして……。

「おまえが何もんなのかなんてどうでもいい。ただこれだけは聞け……さつさと外し方教えてください！！」

もう嫌だ！こんな不気味なもんに関わってなんかいられるか！今すぐ終わらせてレッツゴー・トゥ・スクールじゃあああ！！

「じゃからワシは外す必要などないと言っておろうが。その眼鏡の力を学校とやらに行って試してくればよいではないか」

「だからこんなんで学校行けるかあああ！！」

変な出会い（後書き）

ちよつとずつですが更新は早くなると思います。

早く書いて完結させたいです。

始まり（前書き）

キリのいいところで終わらせたら少なくなりました。
けどこのペースで書いていこうと思います。

始まり

くそつ。

あのアラビア少女、自由になれたただの色々呟いて俺にお礼だけ言
ってどっか行っちゃった。

ありがとうの一言じゃ何に感謝してるかわかるわけないだろ。
礼儀のなつてないガキは嫌いだ。

あの子供特有の馴々しさはたまつたもんじゃない。 いやいや、
文句ばかり言つてもしょうがない。いま一番の問題はコレだ。

目に掛かっている悩みの種を右手で摘んでみる。
やはり動かない。

この眼鏡があつてもなくても今日がテストの日であることは変わ
らない。

あのガキと話していたことはお互いの意思の疎通が全く噛み合っ
ていなかったため忘れることにする。

真つ直ぐ学校へ行くしか何も思いつかないんだからそつするしか
ないだろ。

つーか、赤点にでもなつてしまつたら誰に責任とらせればいいん
だよ？この眼鏡か？あのガキか？

アホな状況に陥つてる俺しか考えないアホな文句を並べながら歩
いていると前方にゴミ捨て場で話し込むオバサンらが見えた。

さーて、俺の姿を見てどう思うのやら。

「お宅の旦那さんたら私の家をお宅の家と間違えたのよ？いくら家
がお隣同士だからって間違えるなんて滅多にないわよ。少し酔いす
ぎなんじゃないかしらね」

「あらっ！そつだったの？主人が失礼しました。私も飲み過ぎだつ
て注意してるんだけどいうこときいてくれないのよねー。困つたも
んだわ」

「そうそう。私の主人も……………」

主婦「つーのはよく喋るな。そんなに不満が募るもんなのかね。俺ならどんなことも大らかな包容力で包んでくれるお嫁さんもらうね。」

「あなたがいてあの主人ありって思うのよね」

「ホントあなたはよく喋るわね。もうその話を何回聞いたと思ってるのよ」

「いやいやいや。ちょっと本音を漏らし過ぎではないですかお二方？」

「！」

何だあれ……………？

始まり（後書き）

このスペースで書いていって終わらせるのにとねくらいかかるんだ
まじゅ……………

見えたもの（前書き）

文化祭に手が回って忙しいです

やっと更新できたしだいですが、とても短いです

見えたもの

目の前の2人の肩に……………風船みたいな……………いやしかし顔と手がある。

そんな異物が主婦とは別に言葉を発して独り言みたいに色々こぼしてやがる。

「男つてばホントに扱いが難しいわ。どこかに取扱説明書でも落ちてないかしらね。あはははは！」

「やだっ！そんな物があつたら私もすぐに手に入れなきゃ。あははは！」

主婦の他愛無い会話に見えるはずなのだが両者の肩についてる物はこう言つてた。

『特に迷惑のかかるお宅の旦那さんの説明書がほしいものね』

『取扱説明書なんておもしろいこと言う人だわ。でもあなたと話すのも結構疲れるの。私はぜひあなたの取扱説明書がほしいわね』

「あつ、それでね……………」

解放したダムの水のように口からよく言葉が流れ出るもんだ。いまだに止まる気配がないな。

……………あつ！気づかれた。

片方の主婦が横目で俺を視界にいれ、つられてもう片方が俺を見た。

途端、両者の口が止まる。2、3秒の沈黙が流れた後……………両者とも手で口を覆って腹から吹きでる空気をこらえた。

「プッ……………」

「ふっ……………」

お二方が俺を気遣ってくれたのはよく伝わったさ。だがあまりいい気分ではなかった。

『あはははははははははは！』

見えたもの（後書き）

文化祭までまだ少し先なので更新は遅くなると思います

見えるものの特徴 1

この眼鏡は何なんだ？

変わったことといえはさきほど爽快に笑い続けた風船みたいなものが見えたくらいだ。

あのオバサンらが笑いをこらえた瞬間に肩にいた風船どもが笑いだした。

人の心が見える眼鏡……………か。

もう文句は何もいまい。この眼鏡が落ちてた時点で、『もし』みたいな状況は起きてたんだ。諦めに近いかもしれないが俺はもうすべての事象を受け入れよう。

だがそれにしてもせつかく『心が見える』なんていう誰もが憧れる力をあんな風船もどきで見えるようにしなくてもいいんじゃないか？

ほら、不思議話みたいな。人を見たら頭に相手の心の声が聞こえてきたりとかそんなありきたりなやつでいい。

あの風船もどきどもが人の本音を喋ったところで人をイライラさせてしかないよ？

まあ、この力のクオリティ性は2、3歩譲って良しよう。だが一生出会うかどうかの『もし』と言った出来事の代償が『外見』だと？

姿が悪魔っぽくなる。とかそんなのなら納得もいくところだが、こちらのアホ丸出しの眼鏡の方が精神ダメージがでかいぞ。

製作者は誰だ！？とりあえず数えきれないほど殴らせろ。

俺はお前のせいで苦しんでるんだ、って文句つけねえとな。

家に挟まれた一方通行の通学路からいろんな店が立ち並ぶ商店街へとでた。

ここを過ぎれば学校に到着だ。

商店街とあって人は多く通る。さらにいくつかの学校の通学路と
なっているため学生ラッシュとなっている。

そんな中に俺が入ってしまえば……………ハハ。

俺はもう一度だけ問題となっている眼鏡を摘んでみる。

……………希望もなんもねえな。

ふみだせつ俺っ！と言い聞かせて無理矢理に足を前に出した。

見えるものの特徴1(後書き)

見たくないもの

んー……………複雑だ。どうしたものか。

俺はただ商店街の歩道を通ってただけだぞ？なのに何故に前方から歩いてきた不良に絡まれなければならんのだ。

その不良はいかにも悪といった感じで、逆立たせた髪に全開の学ラン姿。開いた学ランから見えるシャツには自分に近づいた者の末路を象徴させるような髑髏の絵がプリントされていた。

相手は一見怖い。

だが俺は一見アホ丸出した。

そこがいけなかったのか？ん？

すれ違おうと避けてやったのに不良は俺の行く道を遮って俺に向かってガンを飛ばしはじめたのだ。

もうかれこれ3分は不良の血走った目を見続けている。相手はガン見する以外何のアクションもしないからどう動いてやればいいのか困っているかぎりだ。

なんてっ たつてこいつの目が『オメエ気に入らねえんじゃボケ！いねや！』と言ってるのに対して、こいつの肩に付いてる風船野郎はこういつてるんだ。

『ボボ、ボツボクを見ないでよ！せつかくいじめられないように強そうな格好したのに全然効いてない！この眼鏡が気になってつい顔を近付けちゃったけどどうしよう。この人がとんでもなく怖い人だったらアワワワワワ……………』

どうすりゃいんだよ！

こいつがホントはヘタレだつてわかったけどなあ！何があつたか知らないけど俺にはせつかく勇気を出して一歩踏み出したこのヘタレを返り打ちになんてできねえんだよ！！

そんなことしたらこいつの顎と一緒にこいつの心の中にある大切

な芯みたいなのが砕けてしまう。

どうする俺……？

きつとこいつはこのままだとずっとガン見きかせたまま動かざること山のごとしだぞ。

「何やつとるんじゃおぬしら？」

聞き覚えのある幼い声と喋り方にすごいギャップを与える奴がすぐ傍で俺らを見ていた。

先程と違って、どこから拾ってきたのかペロキヤンを口に加えている。

ペロキヤンを舐めるこいつの姿に不良も俺も視線をもつてかれた。そして視線に気づいたこいつはペロキヤンを取られると勘違いしてペロキヤンを口に頬張って両手で蓋をした。指の隙間から飛び出ている棒が突かれでもしたら危ないぞ。

「つーか取るかアホ！」

「チユツ……」

お互いガン見状態から解放され、立ち去るタイミングを得た不良はそう吐き捨てていった。

不良の肩に付いている風船野郎もホツとした様子であったから結果的には良となっただろう。

……… チユツって何だよ？舌打ちしたかったのか？全然なつてねえじゃねえか！てか大丈夫なのかよ。あいつへタレから変わったのは外見だけで中身はガタガタじゃねえか。

俺が何か力になってやればいいのだが、生憎俺も自分の問題で手いっぱいなんだ。応援くらいしかできそうにない非力な俺が少し虚しく思えてきた。

「いったいさつきまで何を目的としてああも見つめ合っつたんじや？男同士で気持ち悪い」

俺もやつと蜘蛛の糸が降りてきたんだ。なんとかしないとな。

さて、こいつからこの眼鏡のことを聞こうか。

アラビアンな雰囲気少女へ視線をやると、こいつはまたしても

ペロキヤンを口に頬張った。
「わふぁんごぁ(やらんぞ)」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3561i/>

心から見たいもの

2011年1月1日15時06分発行